日本のニューカマー児童における言語教育のあり方についての研究

専　攻　人間発達教育専攻
コース　教育コミュニケーション
学籍番号　Ｍ１３００９Ｈ
氏　名　　長 谷　拓 郎

1. 問題の所在

外国人児童はニューカマーとオールドカマーの2種類に分けることができる。2種類の捉え方に関して具体的な定義は存在しないが、ニューカマーとは、日本の国際化に伴い1980年代以降に来日し、定住した外国人のことである。また、その子どもの多くは日本語が話せない状態である。本論文では比較的日本語の使用に困難を生じる傾向が強いニューカマー児童に焦点をおくものとする。

現在、多くの日本の学校現場ではニューカマー児童の母語、母文化を尊重した指導がされておらず、主に日本語に特化した学習が行われている。ゆえに日本語が理解出来ないニューカマー児童は授業についていけないという実態がある。また、学習に対する意欲の低下や、言語的な理由で周りの友人とコミュニケーションを図ることが困難になり人間関係をうまく構築することができないなどの課題にも直面している。

これらの課題の中でも基本的な課題に立ち返ると言語の相違は大きな要因であると考えられる。言語の相違が原因となり学校生活で不具合などの問題が生じているといえる。それでは、ニューカマー児童が抱える言語の問題をどのように理解すれば良いだろうか。また、ニューカマー児童に対する言語教育はどのようにあるべきだろうか。

2. 研究の目的

本論文では、主に国や、文部科学省がこれまでニューカマー児童を対象に取り組んできた言語教育政策を年代と共に取り上げている。そして母語、母文化を重視した教育がこれまであまりされてきていないということを指摘している。また、実際の学校現場では何が問題として挙げられるのか.小学校での実践の観察を行い確認していく。そのうえで、アメリカマサチューセッツ州の言語教育をモデルとして設定し課題の検討を行う。さらに、それらを踏まえ今後、日本において多文化共生を目指すうえでどのような言語教育に取り組んでいかなければならないのかを明らかにしていくことを目的とする。

3. 主な論文構成

序章
第１章　日本におけるニューカマー児童の現状
第２章　日本のニューカマー児童に対する言語教育
第３章　母語、母文化を尊重した教育
第４章　日本の学校における母語、母文化を大切にした言語教育の事例(1)JSLカリキュラム
第５章　日本の学校における母語、母文化を大切にした言語教育の事例(2)日本語教室
第６章　日本の学校における多文化共生を目指す言語教育の実現

4. 研究の概要

本論文は全６章構成になっており、第１章では、不就学の課題を含めニューカマー児童の現状を把握した。ニューカマー児童数は近年、増加傾向にあり学校ではその対応に追われる結果となった。さらに日本の学校では日本語指導、適応指導のもとに学習が進められているという実態があった。第２章では、日本の国際理解教育の変遷とそれに伴う文部科学省のこれまでの教育政策についてまとめた。日本ではこれまで日本語指導を重視しニューカマー児童の母語、母文化を重視した教育はあまり実施されていなかったことが明らかとなった。第３章では、母語指導の必要性を踏まえアメリカマサチューセッツ州の言語教育を事例として取り上げ２章での課題について考察を行った。マサチューセッツ州は日本より多文化に即した教育を行っており、またアメリカの国内においても早期に多文化教育を推進してきた州の内の１つである。同州では、英語の習得に特化するのではなく児童の母語に重点をおいたカリキュラムを提供している。アメリカの言語教育を紐解くことによって母語指導の重要性を確認することができた。第４章では数少ない日本の母語指導の代表的な取り組みの１つである「JSLカリキュラム」の事例を

取り上げ、効果と意義について考察していく。JSLカリキュラムは日本語と母語を統合したカリキュラムでありニューカマー児童に対して効果的な学習内容であるということが明らかになった。第5章では、日本の母語指導のもう一つの代表的な取り組みである「日本語教室」についてまとめている。日本語教室での実際の事例を通して、ニューカマー児童の課題を探り、母語を重視した教育の意義について考察を行った。そこに参加するニューカマー児童の様子も手がかりにしながら、母語母文化を尊重した教育の必要性を多面的に確認した。第6章では第1章から第3章まで浮き彫りになった問題点を整理し今後のニューカマー児童への対応と日本の言語教育のあり方について考察を行った。

5. 本論文で明らかにされたこと

現在、ニューカマー児童に対する文部科学省の対応の特徴としては、早期に日本語を習得させるというものである。学校内での使用言語は日本語に特化し、授業においても主たる学習言語は日本語である。ニューカマー児童は日本語に重きをおく日本の教育システムにより課題を抱えていた。学習面では、日本語が理解できず学習についていけないことや、日本語が少し理解できたとしても、学年が上がる度に授業で使用される学習言語が難解になり理解できなくなるという場面が見受けられた。生活面では、ニューカマー児童は日本語が理解できないためにうまくコミュニケーションを図れず、人間関係を構築することができないという場面も見受けられた。ゆえに言語の相違は、学習についていけないということや、学校生活を送るうえで人間関係を構築することができないなど大きな障壁となっているように思えた。

一方、日本語教室においてニューカマー児童は積極的に学習に参加し、生き生きと活動に取り組んでいる様子が見られた。日本語教室では、日本語を用いてニューカマー児童の学習を支援しつつ随所で母語、母文化を学習活動に取り入れた活動を行っている。それはニューカマー児童にとって心の居場所となっており、そこは拠り所としてニューカマー児童が学校生活を安心して送っている様子がうかがえた。ニューカマー児童が学校生活を送るうえで母語、母文化を尊重した取り組みは大切なことであることが確認された。

現在、日本での母語を重視した取り組みとしては、先にも挙げたJSLカリキュラムと日本語教室が例として挙げられるが、これらの活動自体も広く普及されているわけではない。母語、母文化を尊重することの意義を理解し、普及していくことが求められるのではないであろうか。

6. 本論文の限界と今後の展望

本論文では、ニューカマー児童の実態、JSLカリキュラムの実践の把握が不十分であったといえる。本来であれば、多数のニューカマー児童と長期的に関わり、JSLカリキュラムを実際に実施し母語、母文化を尊重した指導の有能性や具体的な効果などを検討していくことが必要であった。しかし、本論文においては児童の実態に関していうと、日本語教室を観察した2校の小学校に限定してしまいJSLカリキュラムでは理論や事例を検討するだけに留まってしまった。児童の実態やJSLカリキュラムの実践を把握することで、より母語の必要性を理解することができ、効果的な言語教育のあり方を考察することができると考えられる。

今後としては、以上の不足点を改善するために、ニューカマー児童と長期的な視点でかかわりを持つことや、JSLカリキュラムの実践を行うことを踏まえてこれまでの事例などを細かく分析しさらに内容を深める必要がある。また、実際のJSLカリキュラムを独自に作成しニューカマー児童には特に母語を重視した指導を行いカリキュラムの効果と課題を探っていきたい。カリキュラムの理念、実践をさらに理解し深めることで今後の望ましい言語教育のあり方について検討することができると考える。

主任指導教員　中間玲子
指導教員　中間玲子